2F-12

特16
492

216
416

教のしをり

013889-000-9

特16-492

教のしをり

畑　徳三郎／著

M34
ABB-0114

教の志をしり

明治三四・五

教の心をより

神は晝夜も遠きも近きも問はざるものぞ信
賴心に隔なく祈れ

神様は、人間などゝは違うて、晝であるから、よく物が見にるの夜であるから、分明らぬの、又、近い處のことは、知れるが、遠い處のことは、聞き取れぬ、といふやうな、不自由を御事ではない。如何樣な、手近い足許のことでも、幾千万里

を隔てた、遠方の事でも、烏羽玉の闇でも、一室内の隱れおこでも、決して、隔なく、恰も、掌中の物を視るやうに、御照覽遊ばさるゝものであるから、其の、神德を尊み敬ひ、信心する輩は、必ず、人の見る處でも、人の見ぬ處でも、又、神の御祀り申してある傍であつても、傍でなくても、心に隔をつけず、如何なる場所なりとも、晝も、夜も、變りのない、眞の心一つを以て、御祈り申せこの事である。

これは、吾が教祖の神の、御神訓の一節で、極平易な御言葉

ではあるが、その實、中々奥深い、眞の道理があることで、これを、六かしい言葉を用ゐたり、學問上の理窟を述べて言ふときは、至つてやかましい事になつて、當今の學問、即ち哲學とか、科學とかいふ、學問上の事までも、引合に出されねばならぬ。兎に角、淺學不才の身は、一應の道理を述べて信心の要旨たるべき、一端を概括んで、言はうと思ふ。

さて、この神こいふことについては、古から、種々な解釋があつて、本居翁の歌にも、

神といへば皆ひとしくや思ふらゝ

こりなるもあり虫なるもあり

いやしけごいかつち木靈きつね虎

龍のたくひも神のかたはし

など、詠まれてある。併しながら、これは、我が國古代の宗教心から、言來つたことで、昔の事にすれば、そのやうな考であつたことは、何處の國の、古代に比べて見ても、爭はれぬことであるから、今茲に我が國古代のことを論ずること

は、暫く止めて、眞正に尊ぶべき、神について御咄しやう。

然らば、明治の大御代に於て、而もこの樣に、學問の開けた、智識の進んだときに於て、眞正の神と仰き尊ぶ神は、如何樣に坐すか、といふに、決して古代に於て、譯も理窟もなく、信じて居たやうな、神ではない。その神といふは、即ち、我が教祖の神が、

神は晝夜も遠きも近きも云々

と仰せられた、神樣に外ならぬので、即ち本教の主神と坐

す、天地金乃大神の御事である。昔から、彼の本居翁の歌のやうに、單、尋常に優れたものを、神と尊んで居たやうな、譯なものではなく、考へれば考へる程、勝れた中の勝れた、至つて尊い神である。

まづ、本教の主神と座ます、天地金乃神の、神德の一端を申さうなら、この現世に於ての神德は、如何であらう。皆さんも、御承知の、この大天地、即ち、日月星辰の有樣を見ても、直に分る。凡そ、物が生出で、活動するのは、必ず原因がな

ければならぬ。日月星辰の運行するのは、何によるか、山嶽や、河海は、突然、このやうな物が出來たのではない、必ず、その原因がなくてはならぬ、この原因は、即ち、我が主神の功德である。春夏秋冬の時候は、決して人間の自由にはならぬ、春の花は夏には咲かず、秋の實は冬までは保たず、又、これを自由にせられるとしても、天地間の氣候、その他の、法則に從はねばならぬ。この不思議な、言ふに言はれぬ中に、自然の大法則のある所が、我が大神の神德の有難

い所で、早く言へば、何も角も、悉く神の功德こいはねばならぬ。それぱかりでなく、我々の靈魂は、取りも直さず大神の分靈であつて、御互の身躰は、即ち、大神の分躰である。それゆゑに、この大天地がこのまゝ、大神の不可思議の神德によつて、出來てあるぱかりでなく、小は、我々の身躰、微は、我々の靈魂に至るまで、神德を蒙つて、居るのであるから、如何なる場所、如何なる時に於ても、神の靈德の、存在しないといふことはない。支那の、或る學者も、譬へた通り、

この神の靈德は、實以て、水の地中に、遍く滿ちて居るやうなものである。一寸見ては、何處に水が在るやら分らず、又、その御蔭を蒙つて居ることも、迂濶すること氣がつかないが、さて、その功用を考へれば、實に、際限がしれない程である、若し井戸を鑿つたなら、水は直にこれから出て、汲めども盡きず、飲めどもかはらぬ、といふ有樣で、滾々として絶ることがない。神も、その有難いことを悟つて、信仰し始めたなら、恰で井戸を鑿つたやうなもので、その功德

を受けることは、井戸の水の盡きないやうなものである。然樣であるものを、唯、地上ばかり茫然眺めて、水はないものだなど言つて、澄して居るのは、實に、譯も分らず、氣の知らぬ咄である。

さて、咄が存外横道に這入つて仕舞つたが、神の廣大無邊なことは、このやうであるから、大神の上から、この世界を御覽遊ばされたならば、大天地も、唯、粟粒の如くで、幾千萬年の永き年月も、僅、一瞬の間に過ぎない。このやうに測

知ることの出來ぬ無慮不可思議の大神の神德によつて、成立つて居る世界であるが、この樣に、それ〴〵、形體が組立てられるといふと、日は日たり、月は月たり、星は星たり、山は山、海は海、草は草、木は木、鳥は鳥、獸は獸、といふやうに、區別がついて來るから、それ〴〵、その居場所と、性質とを異にする所で、その物に制限がついて來る。東京と大坂とは違ひ、日本と西洋とは違ふ、昔の世の有樣と、今日の有樣とは、勿論、同じやうでなく、その場所に相違が出來て、そ

の時節に差別が生じて來る。勿論、人は、他の動物に比較べて見れば、萬物中の靈たるもので、物を識別ける智識があり、喜悲を感ずる情があり、思つた事を爲果すといふ意志があるから、天地間の事柄の、目に見に、耳に聞えるものは、一々、此れが斯う、彼れがあゝと、悟ることも出來、又、それに應じて、種々な事を爲るものであつて、歷史や、地理や、天文や、地質などゝ、樣々の學問を研究して、今から千年の昔の狀態を知り、此處に居ながら、外國の樣子をも覺り、幾百

年後の、日蝕、月蝕、の事まで、計算するといふ風で、その智識の進歩は、實に驚く程であるが、又、飜つて、考へて見れば、今日の人が、千年の昔の人でもなければ、萬年の後まで、生きて居られる譯でもなく、明日の命さへ分らぬ、一寸先は暗の世の中で、現在、東京に住んで居る人が、同時に、大坂や、西京に暮さうとても、一つしかない身體は、二つや、三つに、別けるといふことも出來ず、まして、一室の中に閉ぢ籠つて居れば、隣室のことでも分らぬといふ、情ない人の身では

ないか。

教祖の御諭にも

障子一室が儘ならぬ人の身ぞ

とある。又支那のある書にも、仲尼の智、以て筐中の物を識る能はず。ともある通り、如何程、聖人といはれる悧發な孔子でも、筐の中にある物は見別けることが出來ぬやうに、如何に智者でも、賢人でも、障子一室の外に在る物なり、筐の中に藏めてあるものを、外から、その物を見徹すこ

いふ事は出來ぬ。これが、神ならぬ人の身の悲しさ、我々の身躰と、一切の萬物とが、個々別々に、差別れてあるからである。

そこで、人々は、身分が肉眼で、障子一重隣のことを見ることが出來ず。又一町先の話が、聞えぬからというて、神樣も、我々と同じ樣に心得て、人の見て居ない所では、誰も知るまい、と思つて、己が、氣隨勝手な眞似をしたり、人の姿の見ない所では、誰も聞くまいと心得て、惡い內緒言を話

したり、色々の罪過を犯して置いて、教會所へ參詣つたり、神前へでも出た時には、實意らしく、正直らしい、相貌をして拜禮んだり、祈願つたりして、それで信心であるこか、神樣は、聞食て下さるこか、思つて居るは、誠に、はや、淺墓な了簡、氣の毒な心得こ言はねばならぬ。これらは、諺にいふ、耳を蔽うて、鈴を偸むの類で、恐多い、大神を、盲同樣にし、聾にして居るのも、同じやうな、不禮極る者こいはねばならぬ。昔、支那の漢こいふ世に、楊震こいふ德行者があつて、

東萊郡といふ所の、大守こなつた、その時に、管轄を受けて居る、邑の役人が、何處にもあることで、何でも、一つ御意に入つて、引立てゝ貰はうこ思つて、賄賂に、金を持つて來た所が、この楊震こいふ人は、廉潔な人であるから、決して、その樣な汚はしいものは受取らない、そこで、その役人のいふには、斯樣に夜分の事ではあるし、誰一人知る者もありませぬから、どうか枉げて、御受取下さるやうに、こ言つた、すること、楊震中々承知しないで、言ふには、足下は、誰一人知

る者はないと言はれるが、第一には天が知つて居る、第二には地が知つて居る、第三には足下も知つて居れば、第四には拙者も知つて居るではないか、斯樣に多勢知つて居るのに、誰も知らぬなどゝは、飛んでもない事である、と、跳附まし たから、その役人は、大に慚ぢて、歸つたといふことである、世に、楊震が四知の戒といふが、即ち、この事である。如何にも尤なことで、俚諺にも、壁に耳あり、疊に目あり、といふは、此處のことである。彼の中庸にも、

隱れたるより見るゝは莫し微きより顯なるは莫し故に君子は其獨を愼む

と、敎へられてある。人は知るまい、知るまいと、思つて居るのが、大いなる誤で、何日かは、自分の犯した罪科は、世に顯れないといふことはない。近來は、結構な身分の人でありながら、矢張、この誰も知るまい〳〵といふ、淺墓な考から、不義な金錢を貪つて、終には囚獄に耻を曝し祖先の名を汚し、家聲を墜すやうな人も、隨分あるやうであるが、こ

れらは、皆、一時の利慾に眼が眩まされて、天地神明の、御照覽遊ばされてあることを思はぬからで、誠に憫然な至である。よし、神明の御照覽ましますことを知らぬにしても、心眼の眩まぬ人は、彼の、楊震の如きもので、決して、理にかなはぬ、道に外れたことを、爲るものではない。教祖の御教に、

眞の道を行く人は肉眼を置て心眼を開けよ

とあつて、人たる者は、身分や暮向の善くなるばかりが、出

世といふものではない、物質的だけの、僞文明では、役に立たぬ、何でも、一番、心の器量を磨いて、心眼を曇らさないやうにせねばならぬ。さして御互に、この大天地に充滿せられて、寸分の隙もない、我が大神の神德を信じ奉る輩は尙更の事で、縱令、大した過でないにしても、人の知らない所であるから、是位の事は排ふものかと、いふ心になつて爲るのが、最、神の御心に背き、神の嫌ひ給ふ、罪といひ、穢と いふことになるのである。

尙、又、神の有難く、恐しいことを言はうなら、神は、人の行爲の上に、表顯れた事のみ、御覽遊ばさるゝのではない、その人が、何か、心の中に、一念動くことが有れば、早や、悉く御照覽遊ばすのである。畏くも、

皇后陛下の御製にも、

ひとりのみ思ふ心のよしあしを
照しわくらむ天地の神

と、遊ばされてある。その大御心の程は、よく〳〵思ひ奉らねばならぬ。此等の御事について、思出すことであるが、大坂に始めて、本教を御傳へなされた先生は、白神新一郎（諡號は彌廣眞道別命）と申して、今の白神先生の尊父である。ある時、備中國なる、教祖の神の御許へ、參拜せられたが、このときは、未だ、教祖の神の御在世中であつた。すると、教祖の神は、白神先生に足下の部下の信徒に、田中某といふ者がある、その者に渡して遣れと、仰せられて、御直筆の神號を御下げになつたが、白神先生は、一向、さういふ

信徒を覺えて居られないから、私方の信徒中には然樣の者は居りませぬがと、申上げられた。すると、教祖の神は、イヤ慥にある、北の新地籠横町の者である、と仰せられたから、白神先生は、兎も角も、御請をして歸られて、他の信徒の者に、尋ねられたが、誰も知らない、そこで、先方へ、書面を遣されると、果せるかな、田中氏が參て來たので、白神先生も驚かれて、足下は、是迄一度も面會したことのない方だが、何時から、信仰をして居るのかと、尋ねられると、その人

の答に、然樣、私も先生に御目にかゝるは、今日が初で御座ります。併し、先般客人が、此方へ參詣せらるゝ伴をして、一度參りました、その時に、客人は、座席へついて、御訓誡を承つて居りましたのを、私は、上り口に腰掛けながら、仄に聞いて居りましたが、歸りました後、熟、考へますと、如何にも尊き御教で、人としては、どうしても信仰せねばならぬ、と、悟りましたから、爾來、奥床を清めまして、宅で獨で、信心して居ますやうな次第であります、と、申しました。白神

先生も、ほと〳〵感に打たれて、さても、足下は、結構な信心が出來る、今度、本部へ參ると、斯々くて、この御神號を下された程に、今後とも、尙益怠なく、信心せよとて、下渡されました。先生も、田中氏も、他の信徒も、恐入つて感佩しました

ことがある。何と、皆さん、今斯く御話をするにも、聞くにも、共に恐入つて有難いことではありませぬか。如何程、田中氏が、毎日朝夕に、大音で祈れば、拜めば、大坂から數十里隔つた、備中國まで、その聲が聞ゆるものでもなければ、その姿の見える譯のものではない。それは、迚も、我々凡夫の肉眼や、耳の力の及ぶ處ではない、そこが、前にも述べた通り、神は、天地の廣きも、粟粒同樣、千里萬里の差別もなければ、千年萬年の古往今來も、只、一日の如くで、而も晝夜の區別もなく、見徹しに在らせらるゝからで、教祖の神は、千難萬苦の、心行を重ね遊ばされて、肉眼によらせられることもなく、耳や、口の爲に、遮られ給ふこともなく、顯幽感通、無礙自在の、神德を御受け遊ばされ、身は肉躰

を持たせられつゝも、心は、最早、神と御成り遊ばされてあるからのことである。

其れゆゑに、信心する徒は、我が天地金乃大神の、天の極み地の限り、世界中至らぬ隈なく、充滿せられて、己が心の中にも、己が身の内にも、宿らせられてあることを、よく〳〵心得て、晝夜、遠近の差別を思はず、人の見る處、見ぬ處の別へ隔なく、如何なる時、如何なる處でも、悉く、神の守らせ給ふ、懷の中そこ、苟にも僞ることなく、只、眞心一筋に、身を修め、

行を正しくして、神の御心に副ひ奉るやうに、努むべきことである。このやうに心掛けたならば、獨教祖の神のみが、天地金乃大神と、一致遊ばされたばかりでなく、人と生れ來た程の者は、貴賤貧富の別なく、男女老若の隔なく、誰でも、本來の面目を表顯して、神の幽助を蒙り、その幸福を受けることが出來るものである。教祖の神は、一般の人等をして、斯くあらしめたいと、御苦勞下されたことである。我が信徒の輩よ、日に夜に努めて、ゆめ懈怠ること勿れ。

明治三十四年五月十八日印刷
仝　年五月廿一日發行

非賣品

著者兼發行者　畑德三郎　東京市神田區和泉町壹番地
印刷者　池田宗平　東京市淺草區黑舟町廿八番地
發行所　金光教東京教會所　東京市神田區和泉町壹番地
印刷所　東京並木活版所　東京市淺草區黑舟町廿八番地